



集合概念と要素概念

若松良樹*

1. はじめに

K. アローを社会的選択理論の課題を定式化した現代における社会的選択理論の祖と呼ぶことには異論はないだろう。それでは、アローと並び称されることの多い A. センの役割は何なのだろうか。彼は問題解決の人というよりは、問題提起の人と呼ぶことができるだろう。センは、その有名な「リベラル・パラドックス」に代表される一連の問題提起によって、社会的選択理論の枠組みを拡張し、時として混乱させてきた張本人であると言ってもよいだろう。

精緻な理論体系を拡張し、異質な要素を混入させることは、当然のことながら、矛盾、混乱を招く。この面を捉えるならば、センは秩序攪乱者として、非難の対象ともなるだろう。他方、精緻ではあるが、自閉しがちな理論に対して、個人や社会にとって重要な価値を注入し拡張することは、社会的選択理論に生命を与え、新たな可能性を切り拓く試みとして肯定的に評価できるかもしれない。

どちらの解釈が正しいのかは、センによる拡張の意味の理解の仕方にも依存するであろう。ところが、センによる標準的な社会的選択理論からの逸脱は、多岐にわたっており、それらを統一的に理解することは著しく困難なのである。そこで、本稿では、要素概念と集合概念という概念を導入することによって、センによる拡張の意味の一部を理解するための視角を提供することを目的とする。

集合概念と要素概念を導入するために、レストランのメニューを考えてみよう。あるレストランで私が何を食べようか考えているときには、メニューに掲載されている各要素が重要になる。私が食べることのできる品数はただか数品であり、食べもしない料理をランクづけしたり、自分が食べる気のない料理がメニューに掲載されていないことを憤ったりする必要はないだろう。これに対して、私がどのレストランに入ろうかを考えているときには、私が食べようとしている料理だけでなく、他の料理についても精査するだろう。というのも、メニューは料理だけでなく、そのレストランそのものについても何かを語ってくれるからである⁽¹⁾。この意味において、メニューそのものが重要になる。

このようにわれわれがどのような選択を行っているのかに応じて、必要となる情報基礎は変化するのであり、たった一つの情報基礎さえあれば、いつでも適切な選択ができるというわけでもなからう。本稿では、センが理論を分析する際に用いた情報分析という手法を援用し、メニューに掲載されている要素に焦点を当てる概念を「要素概念」、メニューそのものにも焦点を当てる概念を「集合概念」とそれぞれ呼ぶことにする⁽²⁾。

集合への注目はセンによる標準的な社会的選択理論に対する批判と、彼が積極的に提示している正義論の特徴の一つを示しているように思われる。センによる社会的選択理論への批判は多岐にわたるが、一つの眼目は個人が選択する選択肢だけでなく、選択肢の集合であるメニューに注目する必要を強調している点にある。また、センが功利主義やロールズの理論に対する代替案として提示している「潜在能力アプローチ」も、効用や財では

* 学習院大学法務研究科教授

なく、機能の集合に注目したものであり、集合を抜きにしては理解できないものである。

本稿では、二つの局面において、センの理論を集合という観点から読解する。第一は個人による評価という局面であり、第二節において論ずる。第二は社会の価値という局面であり、第三節において検討する。

2. 個人による評価の多様性

(政治的決定に対する) 経済学的モデル

アロー [Arrow 1963: p.1, 3 頁] は、社会の価値を個人による評価と関連付けて理解する社会的選択の方法として二つをあげている⁽³⁾。すなわち、投票による政治的決定⁽⁴⁾と市場メカニズムを通じた経済的決定である。

問題は、この二つの決定方式がどの程度類似しているのかという点にある。経済学による経済的決定の分析は精緻であり、この分析方法を政治的決定に応用することによって、政治的決定の分析においても経済学に比肩しうる精緻な体系を手に入れたいという誘惑は常に存在する。このような誘惑に屈するならば、政治的決定は次のような特徴をもつものとして理解されることになるだろう。

- (1) 外部性の排除「個人による評価の対象はもっぱら自分の状態だけである」。
- (2) 方法論的個人主義「個人による評価から離れて、社会が独自の価値を有することはなく、社会の価値は個人の評価の関数である」。

このモデルの特徴を示すために、A, B, C, D, E の 5 人からなる社会を考えてみよう。選択肢は赤いシャツ (r) と青いシャツ (b) であり、すべての人が赤いシャツを青いシャツよりも強く選好している ($r > b$) としよう。さらに、この社会が二つの状態 $X = \{r, r, r, r, r\}$ と $Y = \{b, r, r, r, r\}$ との間で選択をしようとしているとしよう。それぞれの集合の最初の要素は A の着ているシャツの色を、二番目の要素は B の着ているシャツの色をそれぞれ示している。この場合、社会としてはどちら

の状態を選択するべきだろうか。

経済学的なアプローチは、次のように推論する。まず、この二つの状態 X, Y に対する個人による評価を確認する。その際に、各人は X と Y における自分の状態のみを参照することが求められる (外部性の排除)。つまり、A はそれぞれの集合における最初の要素のペア (r, b) のみを、B はそれぞれの集合における二番目の要素のペア (r, r) のみを評価することが求められる。このペアの評価を迫られるならば、A は $r > b$ という選好を有しているので、 $X > Y$ という評価を下すであろう。また、B から E の人たちは、どちらの状態においても自分の状態は変化しないので、 $X = Y$ という評価を下すであろう。これらの個人による評価を何らかの形 (たとえば、パレート原理) で総合し、社会にとって X が Y より劣ることはないという評価を下すといった具合である。

このように、経済学的アプローチは、集合を評価するに当たって、集合のいくつかの要素に対する個人による評価に還元し、それらの評価を何らかの形で総合するというやり方をとる。

趣味嗜好と価値評価

外部性を排除した仕方での個人的な評価を特定することは自然なものに思われるかもしれない。というのも、個人 A にとっては、ペア (r, b) のみが自分の状態を示す情報だからである。もちろん、この二つの社会のどちらが個人 (たとえば A) にとって狭い意味での自己利益、個人的福祉を促進するのかと問うならば、このような特定方法を用いることにはそれなりの理由もあろう。

しかし、問題は個人にとって狭い意味での自己利益、個人的福祉の促進のみが個人による評価の根拠であるわけではないという点である。そして、センの第一の問題提起は、外部性の排除が個人による評価の正しい特定方法であるのかという点に向けられている。

たとえば、B は A を心から愛しているとしよう。その場合には、B はそれぞれの集合における二番目の要素のペア (r, r) を超えて、A の状態を表している最初の要素のペア (r, b) にも注目する理由があるだろう。その場合には、 $r > b$ という A の選好を所与とするならば、B もまた、 $X = Y$ ではなく、A とともに、 $X > Y$ という判断を下すこと

になるかもしれない。

もちろん、このようなお節介な個人による評価を社会的評価の入力としてよいかは慎重な検討に値する問いである⁽⁵⁾。たとえば、CはAに反感を抱いており、Aの不幸を願っているとしよう。その場合、Cは自分のペアは (x, x) であるにもかかわらず⁽⁶⁾、 $X < Y$ という判断を下すことになるかもしれない。このようなCの個人による評価を社会的評価の入力とするならば、社会的偏見を助長するような政策さえも安易に正当化されかねない⁽⁷⁾。

しかしながら、集合の自分のペアから超え出て、他者のペア、集合全体に配慮することが時として不当な結果を招くという点は、このような越境がいつでも不当な結果を招くということを意味するものではないし、個人による評価の根拠が狭い意味での自己利益に限定されなくてはならないという全面的な禁止を正当化するものでもない。

この点で興味深いのは、アロー [Arrow 1963: p.18, 30 頁] 自身も、外部性の排除を要請しておらず、個人による評価の多様性を承認していることである。彼は、個人が社会状態を順序づける二つの基準を「趣味嗜好 (tastes)」と「価値評価 (values)」とに区分する。趣味嗜好とは、個人が直接に消費するものに基づく評価であり、先の経済学的モデルにおける外部性の排除という要請になかったものである⁽⁸⁾。先の例におけるAによる評価は趣味嗜好の一例である。

アロー [Arrow 1963: p.18, 30 頁] は趣味嗜好に加えて、個人が価値評価に基づいて社会状態を順序づけることの可能性と正当性を認めている。価値評価とは、たとえば衡平性に対する考慮など他者の状態の比較に基づく評価であり、外部性を排除していないものである⁽⁹⁾。価値評価には多様なものが含まれるだろうが、BやCによる評価は価値評価の一例である。

アローが指摘するように、社会的選択の入力である個人による評価が趣味嗜好に限定されないとするならば、経済学的アプローチの構成要素の一つである外部性の排除を乗り越えていくべきだろう⁽¹⁰⁾。そして、この点をアローよりも明確に主張しているのが、センである。

合理的な愚か者

センもアローとともに、個人が選択をする際の原因が多様であることを強調する。具体的には「(1)個人的福祉、(2)個人的自己利益、(3)自分の目標や目的、(4)個人的価値評価、(5)正当な選択の理由となり得るさまざまなもの」[Sen 2002: p.6, 上巻6 頁] を個人が選択する際に依拠するかもしれない理由としてあげている。

外部性の排除は、これらの多様な選択の理由の(1)や(2)にとっては自然な要請であるのかもしれない。というのも、これらの理由は他者の状態についての情報を必要としないからである。また、(1)や(2)以外の理由のうち、いくつかは不当なものであり、社会的選択のための入力とすることは不適切であるかもしれない⁽¹¹⁾。

しかし、自分以外の他者の状態に関心を持つこと自体が不当であるわけではないという点に留意する必要がある。個人は、ソマリアの飢饉の解消など、自分の状態とは直接に関係のない事態を自分の目標にすることができる。もちろん、(3)や(4)は「自分の」価値評価や目標であるが故に、「自分の状態」という概念を拡張することにより、方法論的個人主義の射程の中に収めることは可能であるが、その場合でも、自分の状態を示すペア (x, b) を超えていかななくてはならないだろう。さらに、この文脈において、センによるコミットメント論に言及しておく必要があるだろう。センによると、コミットメントとは自分の状態にかかわらず、一定の社会状態を評価することであり、自分のペアは情報基礎でさえなくなるのである⁽¹²⁾。

このように、(4)や(5)の中には、他者や社会の状態などに言及するものも少なくないだろうし、それらのすべてが不当であると決めつけるわけにもいかないだろう。もしそうであるならば、(4)や(5)に基づいて選択を行うために必要ないくつかの情報を排除し、これらの理由に基づく選択を不可能にするという意味で、外部性の排除は不自然な制約であるように思われる。

それでは、経済学的なアプローチが、方法論的個人主義に従い、個人の選択を所与のものとすると標榜しながらも、個人が(4)や(5)のような理由で選択を行うことを不可能にしているのは、一体どのような理由からだろうか。経済学的なアプローチが個人の評価を切り詰める際に依拠している

のは、「合理性」の概念に対する一定の解釈、具体的には、自己利益の最大化としての合理性という解釈である。この解釈に依拠するならば、必ずしも自己利益とは関係のない他者の状態についての情報を排除することは、合理性の要請として理解することができるだろう。

しかし、合理的な個人は(1)や(2)のみを選択の理由とすべきであるというのは、かなり狭隘な定義であり、この点を指摘したのが、センの「合理的な愚か者 (rational fool)」論である。センによると、合理的な愚か者とは、選択をする際の根拠となるさまざまな理由、「概念の間の差異を見分けられない人」[Sen 2002: p.6, 上巻 6 頁] のことである。その結果、合理的な愚か者は、あらゆる行動を自己利益最大化行動として解釈することになる。

それでは、合理的な愚か者になることの何が問題なのだろうか。自己利益以外の理由に基づいて行動するかもしれない他者の行動の予測に失敗するという問題はさておくとしても、合理的な愚か者となると、外部性の排除に伴い、自己利益最大化以外の理由で行動するために必要な情報基礎も剥奪されてしまっても、何の痛痒も覚えなくなる。その結果、個人は自己利益を最大化すること以外の自由を喪失してしまうのである。センによれば、選択の理由となりうるものは多様であり、「合理性の概念は選択の動機として正当でありうる理由が多様であるという事実と折り合いをつけなくてはならない」[Sen 2002: p.5, 上巻 5 頁] ののである。「合理的な愚か者」論によってセンが主張していることも、個人の情報基礎を拡大することであろう。

選好のメニュー依存性

合理的な愚か者の「愚かさ」を、センが強調している「選好のメニュー依存性」という観点から述べてみよう。選好のメニュー依存性とは、あるペアに対する人々の選好がそのペアの属している集合の性質に依存して変化しうることを言う。

選好のメニュー依存性を説明するために、リンゴ 2 個 (a_1, a_2) とバナナ 1 本 (b_1) が入ったかごから果物一個を順番に選択する二人ゲームを考えてみよう⁽¹³⁾。このかごを $S_1 = \{a_1, a_2, b_1\}$ と表記することにしよう。そして、二人のプレイヤーはともにバナナをリンゴよりも選好しているとしよう

($b_1 > a_1 = a_2$)。そして、パスするという選択肢は与えられていないものとする。

バナナを選好しているにもかかわらず、最初に選択するプレイヤーは、二番目のプレイヤーに選択の余地を残したいと考え、 a_1 を選択したとしよう⁽¹⁴⁾。というのも、最初のプレイヤーがバナナを選択したとするならば、かごに残されているのは 2 つのリンゴだけであり、二番目のプレイヤーはリンゴを選択することを余儀なくされるからである。最初のプレイヤーはリンゴという特定の要素の性質だけでなく、かごという集合全体の有している性質にも配慮して選択をしていることになる。

さて、このかご S_1 にもう一本バナナが追加され、 $S_2 = \{a_1, a_2, b_1, b_2\}$ となったとしよう。二人のプレイヤーは、以前と同様、バナナをリンゴよりも選好しているとする ($b_1 = b_2 > a_1 = a_2$)。この場合、最初のプレイヤーは、もはやリンゴを選択しないだろう。というのも、このプレイヤーは、自分が何を選択するにせよ、二番目のプレイヤーにはバナナとリンゴが残されており、二番目のプレイヤーの選択権を無意味にしてしまう危険はないからである。この場合には、最初のプレイヤーは心置きなく、自分の好きなバナナを選択するであろう⁽¹⁵⁾。

選択の動機の多様性を認めるならば、このような選択の変化を非難しなくてはならない理由は見つけられないだろう。しかし、経済学的なアプローチは、このプレイヤーを批判するであろう。というのも、この選択は「標準的な整合性条件を侵害している」[Sen 2002: p.129, 上巻 133 頁] からである。整合性条件によれば、 a_1 と b_1 というペアに対する選好は、集合の他の要素が増えようが (拡張整合性)、減ろうが (縮小整合性)、 a_1 と b_1 というペアがその集合の中に存在する限り、変化してはならないと求めている。そして、先のプレイヤーの選好の変化はこの条件を満たしていないという意味において「合理的」ではないというのである。 S_2 からの選択において、 a_1 を退け、 b_1 を選ぶのであれば、何故、 S_1 からの選択において、 b_1 を退け、 a_1 を選ぶのか、というわけである。

先のプレイヤーの選好の変化は、整合性条件を満たさないとしても、そのことだけでこのプレイヤーが愚かであることにはならないだろう。ここ

での論点は、バナナという選択肢 (b_1) は、どの集合に属していても同じ意味を有するのか、それとも、同じバナナであったとしても、それが S_1 に属している場合と、 S_2 に属している場合とではまったく意味が異なるのかという点にある。

経済学的なアプローチが用いている外部性の排除という要請が正当であるのは、前者、すなわち、要素の意味がその属する集合から独立して決定されている場合だけである。しかしながら、選択が文脈に依存することは当然であり、外部性の排除や整合性条件のように、文脈を無視する方がよほど愚かであるように思われる。

アローは社会的選択理論の公理を定式化する際に、「ある所与の選択対象を別のモノより選好することを表明する自由をわれわれから奪うことは望ましくない」[Arrow 1963: p.28, 46 頁] として公理の一つである「市民主権」を擁護している。しかし、外部性の排除や整合性条件は、実際上は、一定の見解を表明できなくなる検閲としての機能を果たしているのである⁽¹⁶⁾。

3. 社会的価値の多様性

人格影響的制約

次に、社会的厚生関数が表現するとされる社会的価値の多様性に目を転じることにしよう。「社会にとって政策 X と政策 Y とではどちらが望ましいだろうか」という問いは控え目に言っても、曖昧である。というのも、社会的望ましさの基準も多様だからである。

経済学的モデルの構成要素の一つである外部性の排除によって個人が選択を行う際に依拠しうる多様な理由が排除されていたのと同様に、もう一つの構成要素である方法論的個人主義も社会的価値の多様性を排除しているのだろうか。その可能性は存在するが⁽¹⁷⁾、セン自身は方法論的個人主義を超克する道を探究しようとはしていないので、ここでは方法論的個人主義の枠内で問題を考えてみることにしよう。

社会の価値について考える際に、方法論的個人主義の要請は多くの人に共有されているだろう。たとえば、D. パーフィット [Parfit 1984: p.393,

537 頁] が「人格影響的制約 (person-affecting restriction)」と呼ぶものを考えてみよう⁽¹⁸⁾。この制約によると、人間の福利にかかわる道徳の部分に関しては、われわれの行為が影響を与える人々にとってよいかわるいかという観点から説明しなくてはならない、というのである⁽¹⁹⁾。方法論的個人主義は、社会の価値を、政策によって影響を受ける人々にとってのよさ、わるさ、すなわち、個人的価値に基づいて正当化している点において、人格影響的制約と整合的であることは明らかだろう。

本稿において考察したい問題は、ここから先にある。すなわち、この制約を受け入れるならば、われわれが社会の価値を議論する際に、集合そのものではなく、集合の要素に注目すべきであるということになるのだろうか。それとも、人格影響的制約の下でも、集合そのものを情報基礎とすることが許されるのだろうか。

この問いの意味を明確化するために、前述のシャツの例に立ち戻ろう。すなわち、すべての人が赤いシャツを着ている状態 $X(r, r, r, r, r)$ と A だけが青いシャツを着て、他の人はすべて赤いシャツを着ている状態 $Y(b, r, r, r, r)$ である。この例に、さらにすべての人が青いシャツを着ている別の状態 $Z(b, b, b, b, b)$ を社会の選択肢として追加することにしよう。さて、この場合、 $r > b$ という個人選好からすると、 $X > Y > Z$ という仕方では社会的価値に基づいて三つの集合を順序づけることは自然な解釈であろう。

この解釈の根底にある推論は次のようなものである。まず、各人の状態を示しているのは、集合の各要素であるから、集合の要素を比較する。次に、 X と Y の比較においては、A 以外の人たちの状況は変化をしないので無視して、相違が存在する A の状態だけで比較する (人格影響的制約)。最後に、A の状態を比較するならば、 $r > b$ という個人選好からすると、 $X > Y$ という評価が行われることになるというのである⁽²⁰⁾。

個人の満足度を集計したものとして社会的厚生を理解するという方法論的個人主義の精神に忠実であろうとするならば、要素の価値に還元できない集合そのものの価値を導入することは、社会が独自の価値をもつという幽霊めいたものを信じている証であると理解されることになるだろう。

関係的価値

それでは、社会の価値のすべてが、要素の価値に還元することによって説明できるという意味において要素概念であり、任意の二つの社会のうち、どちらが優れているのかを検討する際に、集合の各要素だけに注目していれば、十分なのだろうか。社会の価値を要素概念として理解する伝統と必ずしも相容れないという意味で、やっかいな一群の社会的価値が存在する。それは個人の状態よりも、他者との関係に注目する「関係的価値」と呼ばれるものであり、多様性、平等などがその一例である。

たとえば、多様性という価値を考えてみよう。多様性をどのように定義するかは争いのあるところであろうが、少なくとも、 $X((r, r, r, r, r))$ よりも $Y((b, r, r, r, r))$ の方が多様性に富んでいると評価することはできるだろう。

すなわち、 X から Y への変化は、 $r > b$ という個人選好の故に、 A の状態が悪化し、それ以外の人たちの状況に変化がないと評価できるにもかかわらず、多様性の観点からは、 $Y > X$ という評価が下されることになるのである。さらに、 X から $Z((b, b, b, b, b))$ への変化は、 $r > b$ という個人選好の故に、すべての人の状態が悪化していると評価できるにもかかわらず、多様性という観点からは、 $X = Z$ という評価が下されることになる。多様性にとって重要なのは、ある要素が集合内の他の要素と異なっているということであり、 X も Z も画一的であるという点において、変わらないものとして理解されることになるからである。かくして、 $Y > X = Z$ という順序が得られることになる。

ここで留意したいのは、多様性という価値がどこに宿っているのかという価値の場所の問題である。多様性は、それが価値であったとしても、その価値は集合の要素には宿っていない。つまり、先の集合 $Y((b, r, r, r, r))$ における最初の要素 b が単独で多様性という価値を担っているわけではない。このことは、前述した $Z((b, b, b, b, b))$ という集合を考えてみると容易に理解できる。集合の中の b という要素を増やし、集合 Y から集合 Z へと移行しても、多様性が高まるわけではない。実際、集合 Y においては多様性に貢献していた要素 b は集合 Z においては、まったく多様性に

貢献しないのである。したがって、多様性（あるいは画一性）は要素概念ではない。

多様性のもつこの性質は、要素のみが価値の担い手であると考ええるならば、当惑させるものであろう。私が赤いシャツを着ていることが私にとって価値であるならば、他者がどの色のシャツを着ているのかはどうでもよい話ではなかろうか。また、私が他者と違うシャツの色を着ているとか、同じシャツの色を着ているということには価値はなく、私が自分の好きな色のシャツを着ていること (r) だけが重要なのではないだろうか。

多様性に対するのと同様の疑念は、平等という概念に対しても向けられるであろう。私が自分の境遇に満足しているならば、それが他者と等しかろうが不平等であろうが重要ではない、というわけである。価値とは誰かにとっての価値であるとするならば（個人的価値）、他者と等しいこと、平等のようなものに価値があるのはどうしてであろうか^[21]。

平等や多様性が関係的価値と呼ばれることからすると、それらの価値は関係に宿ると考えることも可能であろう。たとえば、他人と異なっているという関係や、他人と同一であるという関係に価値があるという理解することである。このような理解は、 A が青いシャツを着ているという状態の意味が $Y((b, r, r, r, r))$ と $Z((b, b, b, b, b))$ では異なり、 b という要素そのものが問題となっている価値（多様性）を宿しているわけではないことを示している点では優れているだろう。

しかし、関係的価値という概念は、平等や多様性という価値の説明を先送りしているだけではないか、との批判にさらされることになるだろう。というのも、前述したように、他者と同一であったり異なったりすることが、それ自体で価値を有するとは考えにくいからである。それでは、関係的価値と呼ばれるものの価値の宿る場所はどこにあるのだろうか。

水準低下批判

多様性と同様、関係的価値とされる平等に対して、この点を衝くのがパーフィット [Parfit 2000: sec.5] による「水準低下批判 (the Leveling Down Objection)」である。平等の価値が、私が他の人と同じであることに存するとするならば、どんな

に低い生活水準であったとしても、私と他者の生活水準が同一であれば平等という価値が実現されたことになる。たとえば、先ほどの例における $Y((b, r, r, r, r))$ と $Z((b, b, b, b, b))$ とを比較してみよう。個人選好がすべて $r > b$ であるとするならば、 Y から Z への移行は、集合の各要素のみをながめるならば、水準低下である。にもかかわらず、平等が実現されたという意味で集合全体の価値が向上しているという評価を下すことは、著しく直観に反するのではなからうか。

われわれが平等という観念を持ち出すときに、実際に憂慮していることは、境遇が悪い人の状態と他者の状態との間の相対的格差であるというよりは、むしろ、境遇が悪い人の絶対的な福利水準の低さなのではないか、とパーフィットは指摘する [Parfit 2000: sec.9]。つまり、パーフィットに言わせるならば、平等主義者にとって $X((r, r, r, r, r))$ と比較した場合、 $Y((b, r, r, r, r))$ が好ましくないのは、 A の状態 (b) の悪さの故であり、 X の方が望ましいのは、 X の方が平等だからではなく、 A の状態が改善するからである。

このような直観の背後にあるのは、平等主義ではなく、「優先主義 (the priority view)」, すなわち、「人々に利益を与えることは、その人々の境遇が悪いほど、より重要になる」 [Parfit 2000: p.101, 172 頁] と主張する立場が存在する、とパーフィットは考える。つまり、平等という価値は、実際には A と他者の間の関係ではなく、 A の生活水準それ自体、すなわち、要素に宿っているというのである。

パーフィットによる平等に対する批判がどの程度妥当するものであるか、平等主義に対する代替案としてパーフィットが提示している優先主義には難点がないのかについては、議論のあるところであろうが、本稿の観点から優先主義が興味深い点は、それが、人々との相対的な格差ではなく、絶対的な境遇を情報基礎とする点において、人格影響的制約を遵守していることにある。要するに、パーフィットは、平等主義が要素の価値に還元できない側面を有していることを反直観的であると批判するとともに、それに対する代替案として、要素の価値に還元できる優先主義を提示しているのである。

それでは、平等に対するのと同じ批判は、平等

と同じく関係的価値である多様性にもあてはまるのだろうか。結論から先に述べるならば、パーフィットによる平等に対する水準低下批判と同様のことは、多様性についてもあてはまる。というのも、 $r > b$ という個人選好を前提とするならば、 $Y((b, r, r, r, r))$ から $Z((b, b, b, b, b))$ へと移行し、平等を実現することに伴って発生する水準低下は、小規模ではあるが、 $X((r, r, r, r, r))$ から Y へと移行し、多様性を実現することにも伴って発生するからである。

ただし、関係的価値の背後には実際には要素への注目が存在するというパーフィットの診断が、平等に関しては、たとえ正しかったとしても、少なくとも多様性にはそのままでは適用できない、という点には留意する必要がある。というのも、多様性を実現するために、 X から Y に移行すべきであると主張される際に問題視されているのは、 X における A の状態が r であることそのものではなく、すべての人の状態が同一であることであり、この点において、多様性は要素そのものではなく、他の要素の状態も含めた集合全体を情報基礎とせざるを得ないからである。この意味において、多様性は人格影響的制約から逸脱しているように見える。

価値の場所としての集合

したがって、平等ではなく、多様性にも関心を向けるべきであるとするならば、われわれは人格影響的制約の軛から逃れて、別の情報基礎を探究する必要があるのだろうか。もしそうであったとするならば、その情報基礎とは何だろうか。この情報基礎を明確化しようとして、多くの理論家は頭を悩ませてきた。たとえば、J. S. ミルも個性の重要性を強調したことで知られるが、それでは、彼にとって、何故個性は価値を有するのだろうか。

一つの解釈は、各人が自分の能力を十全に発達させ個性を発揮している状態それ自体に価値があるというものである。本稿の用語で言えば、要素に価値があるという解釈である。この解釈にテキスト上の根拠があることは否定できないが²²⁾、個性は本来、関係的な概念であり、他者と相違していることが前提となっている。したがって、私が自分の能力を十分に発達させた状態が、他者と異なっているかどうかは別問題であり、個性を要素

概念として十分に捉えることはできないように思われる⁽²³⁾。

むしろ、ミル自身もまた、「状況が異なれば、大衆と異なった行動をとること自体に意味はない」[Mill 1991/1859: ch.3, para.13]と認めていることから理解できるように、「大衆と異なった行動」という要素がそれ自体で価値を有するとは考えていない。ある人がとった大衆と異なった行動は、集合の他の要素である大衆が多様な行動をとっている時代にはそれほど価値を有するものではないが、ミルの時代のように、大衆が一律の行動をとろうとしている時代においては、「大衆に順応しない実例を示すだけでも社会にとっては意味がある」[Mill 1991/1859: ch.3, para.13]というのである。

このようなミルの個性擁護論は、多様性の道具的正当化としての性質を有しているが、ここで注目したいのは、正当化されている対象が要素ではなく、集合であるという点である。つまり、赤いシャツや青いシャツといった要素そのものが価値を有するのではなく、 $Y((b, r, r, r, r))$ という集合そのものが価値を有するとして理解されているのである。たとえば、A が青いシャツへと着替えるという選択は、 $W((r, r, b, b, b))$ のような社会では、それほど意味はないが、 $X((r, r, r, r, r))$ のような社会においてはとりわけ意味のあることであるとして評価されることになる。

要素だけでなく、集合を価値として評価することは、個人としても社会としても十分にありうる話である。たとえば、人生計画や将来世代に影響を及ぼす決定など遠い将来に関わる選択について考えてみよう。遠い将来に関わる選択においては、「将来の需要や供給の性質は言うに及ばず、自分自身の将来の欲求やニーズの性質についてさえも定かではない」[Carter 1991: p.51]。このような状況においては、現在の選好に基づいて最適解を探究するすることが将来においても合理的であるとはかぎらない。というのも、将来の選好が現在の選好と同一であるという保証はないからである。それよりはむしろ、将来の状況が明確になった段階で、それらの情報を利用して合理的な決定ができるように、将来に選択肢を残す方が合理的であると考え、「柔軟性に対する選好 (preference for flexibility)」[Kreps 1979]を有する人たちが存

在するであろう。柔軟性に対する選好を有する人たちは、将来、自分がどのような選好をもつようになるかはわからないが故に、現在魅力的には見えるもののたった一つしかない選択肢よりは、ある程度多様な選択肢を複数含んだ集合を選好するであろう。このように、集合そのものが選好の対象となり得るのである。

この例が示しているように、要素か集合かという評価の対象に関する区分は、個人選好のような個人的評価かそれとも社会による評価、すなわち非個人的評価かという評価の性質に関する区分とは同一ではない。したがって、要素に対する個人的評価と非個人的評価が存在しうるのと同様に、集合に対する個人的評価と非個人的評価とが存在しうるのである。たとえば、先の柔軟性に対する選好を有する個人は、集合という対象に対して個人的評価を行っている。もちろん、集合そのものを非個人的な仕方でも評価することは可能であるが、このことは、個人的な仕方でも集合を評価する可能性を閉ざすものではない⁽²⁴⁾。センもまた、さまざまな場面で、選好という概念を維持することを宣言しているが、このことは彼が集合にも注目していることと矛盾するものではないのである⁽²⁵⁾。

したがって、方法論的個人主義の前提を維持し、個人による評価の関数として社会の価値を理解したとしても、集合を評価の対象とする可能性は排除されておらず、多様性や平等などの関係的価値の存在は、必ずしも当惑させるものではないのである⁽²⁶⁾。

集合概念としての自由

前述した「柔軟性への選好」がその後の社会的選択理論における「選択の自由」の定式化をめぐる議論のきっかけとなったことから理解できるように、自由という多義的であるが故に論争的となってきた概念の一部もまた集合概念として理解することができる。

センは従来の正義論批判の文脈において、効用や財から機能に焦点を移す必要性を主張する一方で、機能だけでなく、機能の集合である潜在能力へとさらに視点を移動することを求めている。潜在能力アプローチは、平等論の文脈においてのみならず、自由論の文脈においても重要な貢献である。というのも、自由という概念を十全に捉える

ためには、選択されなかった選択肢の存在を含めた選択肢の集合についての理解が不可欠だからである。

この点をセンがよく引き合いに出す例に即して述べるならば、断食と飢餓とは、どちらも飢えているという同一の状態にあるにもかかわらず、まったく異なる事態である。というのも、前者は他にも選択肢が存在するにもかかわらず、あえて飢えるという選択肢をとっているのに対して、後者は飢えるという選択肢以外の選択肢は存在しない点に相違があるからである。このように他にも選択肢が存在しているという点において、断食は自由であるのに対して、飢餓は不自由であるという相違が存在する。したがって、自由を理解しようとするならば、選ばれなかった選択肢も含めた選択肢の集合についての情報も必要だというのである。

それでは、選択肢の集合（通例に従い「機会集合 (opportunity set)」と呼ぶ）の価値をどのように測定すべきなのだろうか。この点において、センは二つの極端な立場を退ける。

要素評価説

センが批判する第一の極端は、集合の価値を要素の価値に還元することによって、集合に独自の価値を認めない立場である。その一例としては、ある機会集合の価値をその集合の中の最善の要素の価値と同一視する「要素評価説 (elementary evaluation)」[Sen 2002: p.663, 下巻 293 頁] と呼ばれる立場が存在する。

たとえば、ある個人が四着の赤いシャツからなるワードローブ $X(\{r, r, r, r\})$ と一着の赤いシャツ、四着の青いシャツからなるワードローブ $Y(\{r, b, b, b, b\})$ との間で選択をしているとしよう。最後に、この個人は赤いシャツを青いシャツよりも強く選好しているとしよう ($r > b$)。

要素評価説によれば、以上の例における二つのワードローブ X と Y は、この個人にとって同等の価値を有することになる。というのも、 X の中の最善の要素と Y の中の最善の要素とはともに r であり、同一の価値を有するからである。

なるほど、個人が一度に着ることができるシャツは一着だけであり、個人は集合の中から一つの選択肢しか選択できない。そして、選択されない

選択肢は、最善の選択肢ではない以上、選択の結果に影響を与えることはない。そうであってみれば、要素評価説のように、最善の選択肢の要素の価値によって機会集合の価値を測定することにも一理あろう。

しかしながら、以上のような要素評価説には、機会集合の尺度としては難点がある。このことを示すために、新たなワードローブ $Z(\{r\})$ を導入しよう。 Z は一着の赤いシャツからのみなる単一要素集合である。要素評価説に従うならば、 Z の最善の要素は、 X や Y の最善の要素と同一であり、したがって、 Z も X や Y と同一の価値を有することになる²⁷⁾。

しかし、単一要素集合 Z からの選択においては、赤いシャツを着ることを余儀なくされるのであり、そこに満足はあったとしても、自ら選択するというプロセスは著しく侵害されている。自由の中でも、自らの手で選択するという側面を、センは「プロセス自由」[Sen 2002: ch.20, sec.2] と呼んでいる。

プロセス自由が意味をもつためには、別の選択肢も存在しなくてはならないのであり、単一要素集合 Z を、 X や Y といった他の選択肢を含んでいる機会集合と同一の自由を与えるものとして評価する点において、要素評価説は、自由の尺度としては失敗している、というのである。

基数説

自由という文脈において、集合と要素の関係に関する要素評価説は、集合の価値を要素の価値に還元しようとする一つの極端な立場であった。センが排除しようとするもう一つの極端な立場は、要素の価値とはまったく無関係に集合の価値を測定しようとするものである。この立場にもいくつかのバリエーションが存在するが、その代表的な存在は、選択肢の数、および集合の濃度に注目する「基数説」である²⁸⁾。

基数説によれば、ある機会集合の与える自由の程度は、その集合に属する要素の数によって測定される、というのである。基数説は、確かに、要素評価説の難点を回避するのに成功している。というのも、基数説に依拠するならば、単一要素集合 $Z(\{r\})$ と比べて、複数の要素を有する機会集合 $X(\{r, r, r, r\})$ は多くの自由を与えるものとして評

価値されることになるからである。この点において、基数説は単一要素集合の不自由さをうまく捉えていると言えるだろう。

しかし、基数説にも自由に関するわれわれの直観に反する部分がないわけではない。第一に、要素の数が増えると自由の価値も増すとするならば、本人が絶対着たくないような青いシャツばかりが 5 着存在するワードローブ $W(\{b, b, b, b, b\})$ の方が、 $X(\{r, r, r, r\})$ よりも自由度が高いことになってしまう。自由が自分の「望むような生き方を選択する自由」[Berlin 1969: p.179] を意味しているのであれば、 W が X よりも自由度が高いと評価することは、われわれの直観に反する。

第二に、基数説は単一要素集合から選択する際には自由は存在しないと想定し、この想定を「無選択状況の無差別」[Pattanaik & Xu 1990: p.386] として公理化している。すなわち、 $\{r\}$ も $\{b\}$ も自由が存在しないという意味において無差別であるというのである⁽²⁹⁾。

これに対して、セン [Sen 2002: p.602, 下巻 229 頁] は無選択状況の無差別という公理自体が直観に反すると批判する。確かに、 $\{r, b\}$ という機会集合から r を選択することと比べて、単一要素集合 $\{r\}$ から r を選ばされることは、自分の手で選択するという自由のプロセスの側面が著しく侵害されていることは否定できない。

しかし、自由にはプロセスの側面だけではなく、自分の望むことを行うという機会的な側面も存在するとセンは主張し、このような自由を「機会自由」[Sen 2002: ch.20, sec.2] と呼んでいる。機会自由の観点からは、自分が好きな赤いシャツを着ることと、自分が大嫌いな青いシャツを着ることでは、大きな相違があり、 $\{r\}$ と $\{b\}$ とは無差別であるどころか、重大な相違があるというのである。

以上のような理由から、純粋な基数説を乗り越えて、集合の要素の量だけでなく、要素の質を評価しようとする動向が見られる。ただし、その具体的な方向性に関しては、争いが存在する。セン [Sen 2002] は要素に対する選好を自由の尺度の中に取り込もうとしているが、選好ではなく要素の「相違」を自由の尺度としようとする試みも存在する [Pattanaik & Xu 2000]⁽³⁰⁾。

本稿でこの論争の細部に立ち入ることはできないが、集合の価値の評価においては、要素評価説

のように完全に要素の価値に還元することはできないものの、何らかの仕方では要素の評価が影響を与えることは承認されていると言ってよいだろう。

4. おわりに

本稿は、集合概念という視座を設定することにより、多様な側面を有するセンの挑戦の意義を理解しようとする試みである。第二節で明らかにしたように、センは個人による評価の理由となりうる多様な要素を社会的選択理論に導入しようとしている。したがって、社会的選択のために必要な情報基礎は拡大し、社会的選択という営為は必然的に複雑なものになる。

また、第三節で述べたように、従来の社会的選択理論のように最大化を社会的選択を導く目的として理解する場合には、集合の中の最大の要素以外の要素に注目する必要はないだろう。しかし、社会的選択の目的を最大化に限定せず、分配的な考慮も視野に収めようとするならば、最大の要素以外の要素、集合全体への注目は不可避となる。

もちろん、集合は別の集合の要素となりうることから理解できるように、集合概念と要素概念との区分は、それほど明確なものではない。さらに、セン自身も指摘しているように、集合を評価するためには、集合そのものだけでなく、その要素に対しても何らかの仕方では言及せざるを得ないことを考えるならば、この区分はますますあいまいなものとなるだろう。要するに、集合概念という視座だけで、すべてが説明できるわけではないのである。

他方において、集合に注目しなければ、十全には理解できない諸概念がある。それは、平等、自由、多様性などといった概念である。ある状態と別の状態のどちらが自由、平等、多様であるかを理解するためには、各状態に含まれている要素の評価を超えて、集合全体を評価の対象とせざるを得ない。その結果、要素の評価を軸に蓄積されてきた標準的な社会的選択理論の方法のいくつかは放棄されるであろう。しかし、社会的選択理論の目的が、従来の方法論の精緻化のみにあるのではなく、個人の評価や社会の価値を明確化し、それ

らについての合理的な選択や議論の方法を探究することにあるとするならば、この放棄は不可避なのである。センによる標準的な社会的選択理論からの逸脱の根底にはこのようなメッセージがあるように思われる。

[注]

- (1) メニューのもつこの価値を、センは「メニューの認識的価値」[Sen 2002: p.255, 上巻 261 頁]と呼んでいる。
- (2) もちろん、集合を要素とする集合を考えることも可能であるから、集合概念と要素概念の区分は相対的なものである。
- (3) 社会の価値を個人による評価とは無関係に理解することも可能ではあるが、アローはそのような理解を「賦課的」であるとして退けている。
- (4) 政治的決定の文脈において、個人による選択についての情報を入力に投票に限定することが狭隘であることは否定できないが、ここではこの問題に立ち入らない。
- (5) センが「リベラル・パラドックス」の問題提起の際に用いた例においては、他者のペアに関心を示すお節介りな人が登場していたことを想起すべきであろう。
- (6) あるいは X から Y に移行したところで自分には実害がないことを確認した上で。
- (7) この点を危惧したのが、初期の R. ドゥウオーキン [Dworkin 1977] の権利論である。彼は他者の状態に対する選好である外的選好を排除する装置として、個人の権利を擁護している。
- (8) アロー [Arrow 1963: p.24, 40 頁] によると、この想定は、厚生経済学においてしばしばなされるものである。
- (9) アローの言葉を用いるならば、価値評価の場合、個人が直面するのは、選択肢の「ペア」ではなく、多くの選択肢を含んだ「環境」ということになるのだろう。参照、Arrow (1968: p.20, 32 頁)。
- (10) ただし、アロー自身が趣味嗜好と価値評価という区分を徹底していたのかに関しては、疑問なしとはしない。というのも、アローは投票という方法と市場とを独裁や慣習と対比しつつ、前者を「社会的選択を行う際に多くの個人の趣味嗜好を融合する方法」[Arrow 1968: p.2, 5 頁]として特徴づけているからである。
- (11) 前述の例における C の反感のように。
- (12) コミットメントについては、参照、Sen (1982)。
- (13) この例は、Sen (2002: ch.4, sec.3) を改変したものである。
- (14) $C(S_1) = a_1$
- (15) $C(S_2) = b_1$
- (16) センは、いささか挑発的に「思想の自由の根本的な否定」[Sen 2002: p.5, 上巻 6 頁]とまで述べている。

- (17) たとえば、個人の価値には必ずしも還元できない非個人的な価値として、自然環境などを考えることができるだろう。
- (18) ただし、パーフィット自身はこの制約を擁護しているわけではない。
- (19) ちなみに、人格影響的制約は、アローによる趣味嗜好と価値評価の双方を含みうる。つまり、前述の B による選択は、A という他者の状態に言及しているが故に、価値評価ではあるが、B の選択によって影響を与える人 (A) にとってよいかわるいかを根拠にしている点において、人格影響的制約に従っているのである。
- (20) 同様の理由から、 $Y > Z$ 。
- (21) 平等に価値があるのか、あるとしたなら、それはどこにあるのかという問題についての論争として、有名なものは J. ブルームと L. テムキンによるものである。この論争については、参照、井上 (2017: 第 4 章)。なお、井上によるこの問題に対する回答は「宇宙的価値」としての平等といういささか意外なものである。
- (22) たとえば、ミルによる天才の価値の強調 [Mill 1991/1859: ch.3, para.11] は、要素概念としての個性という解釈と整合的なものである。
- (23) 人間の本性が同一であるとするならば、能力を十分に発達させることは、個性の喪失につながるかもしれない。
- (24) 多様性の個人的価値については、参照、若松 (2017)。
- (25) たとえば、参照、Sen (2002: ch.9)。
- (26) ただし、本稿の主張は、多様性や平等は、集合に注目することによって、個人的価値として説明することもできるというだけである。したがって、個人的価値の観点から多様性や平等のすべての側面を捉えることができるとか、方法論的個人主義を捨て去り、非個人的な価値を正面から認める必要はないとまで主張するつもりはない。
- (27) $X = Y = Z$
- (28) その代表的な存在は、Pattanaik & Xu (1990) である。
- (29) この公理は、他の公理とともに、選択肢の数で自由の量を測定しようとする基数説を正当化するための出発点となっている。そして、この公理なしでは、基数説はその目的地に到達できないのである。
- (30) ただし、要素の相違を選好に依拠せずに同定できるのかという点に関しては、異論が存在する。この点に関しては、参照、Sugden (2003)。

[参考文献]

Arrow 1963: Kenneth Arrow, *Social Choice and Individual Values* 2nd. edition, Yale University Press, 長名寛明訳『社会的選択と個人的評価』(日本経済新聞社, 1977 年)。

- Berlin 1969: Isaiah Berlin, *Four Essays on Liberty*, Oxford University Press.
- Carter 1991: Ian Carter, *A Measure of Freedom*, Oxford University Press.
- Dworkin 1977: Ronald Dworkin, *Taking Rights Seriously*, Harvard University Press, 木下毅, 野坂泰司, 小林公訳『権利論 (増補版)』(木鐸社, 2003 年), 『権利論(2)』(木鐸社, 2001 年)。
- Kreps 1979: David Kreps, "A Representation Theorem for 'Preference for Flexibility'," *Econometrica*, vol.47, 565-77.
- Mill 1991/1859: John Stuart Mill, "On Liberty," in John Gray (ed.) *On Liberty and Other Essays*, Oxford University Press, 山岡洋一訳『自由論』(日経 BP 社, 2011 年)。
- Parfit 1984: Derek Parfit, *Reasons and Persons*, Clarendon Press, 森村進訳『理由と人格』(勁草書房, 1998 年)。
- Parfit 2000: Derek Parfit, "Equality or Priority," in Clayton, Matthew and Andrew Williams (eds.) *The Ideal of Equality*, Palgrave Macmillan, 81-125, 堀田義太郎
- 訳「平等か優先か」, 広瀬巖編・監訳『平等主義基本論文集』(勁草書房, 2018 年), 131-205 頁。
- Pattanaik & Xu 1990: Pattanaik, Prasanta and Yongsheng Xu, "On Ranking Opportunity Sets in Terms of Freedom of Choice," *Recherches Economiques de Louvain*, vol. 58, 383-90.
- Pattanaik & Xu 2000: Pattanaik, Prasanta and Yongsheng Xu, "On Diversity and Freedom of Choice," *Mathematical Social Sciences*, vol. 40, 123-30.
- Sen 1982: Amartya Sen, *Choice, Welfare and Measurement*, Basil Blackwell, 大庭健・川本隆史訳『合理的な愚か者』(勁草書房, 1989 年)。
- Sen 2002: Amartya Sen, *Rationality and Freedom*, Harvard University Press, 若松良樹, 須賀晃一, 後藤玲子監訳『合理性と自由 (上・下)』(勁草書房, 2014 年)。
- Sugden 2003: Robert Sugden, "Opportunity as a Space for Individuality," *Ethics*, vol.113, 783-809.
- 井上 2017: 井上彰『正義・平等・責任』(岩波書店)。
- 若松 2017: 若松良樹「ミルにおける自由と効用」, 若松編『功利主義の逆襲』(ナカニシヤ出版, 2017 年), 147-74。